

## 研究ノート

# ボリビア・ラパス県溪谷部のアイマラ語口承テキストと考察 — キリワヤのアシエンダ女領主による横暴のオーラルヒストリー

フリアン・タピア Julián TAPIA

アスンタ・タピア・デ・アルバレス Asunta TAPIA DE ÁLVAREZ

藤田護 Mamoru FUJITA

慶應義塾大学 UNIVERSIDAD DE KEIO

アンデス・オーラルヒストリー工房 TALLER DE HISTORIA ORAL ANDINA

## 要旨

本稿は、アイマラ語による口承の物語や歴史語りを原文対訳の形式で公開しつつ、それぞれの語りの特徴について考察を加えるという、藤田が展開してきた取り組みの一環を構成する。ここでとりあげるのは、弟フリアン・タピアと姉アスンタ・タピア・デ・アルバレスによって語られた、両姉弟の祖父がキリワヤ（ボリビアのラパス県ムリーリョ郡）のアシエンダ領主によって虐待されていたのに対し、祖母がラパスの街に住む自身の姉妹の結婚相手の軍人（大佐）を頼り、大佐からの働きかけでこの虐待を止めてもらうという、家族の中で伝承されてきたオーラルヒストリーである。冒頭Ⅰ章では、どのような協力関係の下でこの調査が行われたかについて述べる。Ⅱ章では、この語りのあらすじを示す。Ⅲ章では、この語りがアイマラの人々と支配階層のあいだのどのような社会関係を示しているか、姉と弟で語りの強調点がどのように異なっていて、またどの点は共通で踏まえられているか、そしてこの語りのアイマラ語の文体にどのような特徴が見られるかについて考察する。Ⅳ章では、アイマラ語の表記や、訳に用いるスペイン語のバリエント（アンデス・スペイン語）とその意義について述べた後で、原文対訳テキストを掲げる。Ⅴ章では、結論と今後の展望を述べる。

## キーワード

アイマラ語、オーラルヒストリー、ボリビア、アシエンダ

## 目次

- Ⅰ 調査・録音の経緯と語り手について
- Ⅱ 語りのあらすじ
- Ⅲ 語りについての考察
- Ⅳ 原文対訳テキスト（アイマラ語、アンデス・スペイン語、日本語）
- Ⅴ まとめと今後の展望

## I 調査・録音の経緯と語り手について

本稿では、タピア、サラビア、タピア、藤田 [2015] およびタピア、藤田 [2020] に続き、筆者がボリビアのラパス県ムリーリョ (Murillo) 郡メカパカ (Mecapaca) 市のユーパンパ (Yupampa) 村に住むアスンタ・タピア・デ・アルバレス (Asunta Tapia de Álvarez, 1937-2022)、および、彼女の弟であり、同郡パルカ (Palca) 市キリワヤ (Quillihuaya) 村に住むフリアン・タピア (Julián Tapia, 1947-) の二人のアイマラ語の語りについて、これを録音したものを聞き起こし、スペイン語と日本語の原文対訳の形で刊行するものである。同時に、この語りがもつ特徴についての考察を加える。本稿では、この一つのまとまったテキストについて、原文対訳を公開して研究資料の土台を整備しつつ、他の研究に資することを目標としている。将来的には、口承文芸やオーラルヒストリー、およびラジオドラマまで含めた複数のアイマラ語の語りのジャンル間の文体の相違について論じ、かつアイマラ語とスペイン語の接触について言語的な考察に至ることを目指しているが、そのような論を構築するための土台の一つとして位置づけられる。

本章では、導入として、語り手の二人や録音された語りについての詳細な情報を示すとともに、調査がどのような地理的・社会的文脈で行われ、どのような意義をもちうるかについて述べる。ユーパンパ村は、ボリビアの行政上の首都ラパス市内を貫いて流れ下るチョケヤブ川 (Río Choqueyapu、アイマラ語表記では Chuqiyapu) の、ラパス市から下流の方向に開けたリオ・アバホ (Río Abajo) 渓谷に位置している。キリワヤ村は、チョケヤブ川から筋一つ離れたパルカ渓谷を下っていった先に、雪山であるイリマニ (Illimani) 山の麓に位置する村である。それぞれの地域が果物の生産を主体とし、それ以外にもトウモロコシやジャガイモや野菜類が栽培されている。アスンタ・タピアもキリワヤ村の出身であるが、まだ小さい頃にラパス市内の日本人商人の家庭で住み込みの下働きとして幼少期を過ごし、キリワヤのアシエンダに戻って働いた後に (これらの語りのテキストは未公開)、ユーパンパのアシエンダで先住民の東ね役であるマヨルドーモ (mayordomo<sup>1</sup>) の役にあった男性と結婚して、農地改革でそのアシエンダの土地が分配されたのを受け取って、同じユーパンパ村に住むようになった。

本稿でとりあげるのは、キリワヤのかつてのアシエンダの女性領主グメルシンダ・メンディサバル・パラシオス (Gumerinda Mendizábal Palacios) が、このアスンタとフリアン姉弟の祖父を虐待していたのに対して、姉弟の祖母 (と母親) が首都ラパス市の軍人の助けを借りて、この虐待を止めさせるという内容の語りである。時期としては 1920 年代から 1930 年代のことであろうと推察される。この語りは、スペインからの独立以降も植民地主義が根強く社会を規定してきたボリビアにおいて、アイマラ先住民に対する抑圧と、家族がその抑圧にどのように対抗・抵抗したかについての、一つの具体的な姿を明らかにしている。

また、この語りを検討することは、一般に「オーラルヒストリー」と名付けられるジャンルを、アイマラ語での語りの側から再検討することへとつながる。本稿で示すテキストでは、一つの家族が実際に生きた歴史が語られるが、これはこの姉弟が直接体験したものではなく、親から伝承された経験である。アイマラ語は動詞の活用の種類や、動詞 *saña* 「言う」の使用を通じて、本人が直接経験した過去と、他人から伝え聞いた過去とを文法的に区別する。この文法上の区分は、一般に言うところの「オーラルヒストリー」(歴史語り) と「口承文芸」(物語) という区分に、厳密には対応しない。以下 III 章において本稿でとりあげる語りの文体的特徴をより詳細に検討するが、本稿で示すアイマラ語の語りは、いわゆる「口承文学」に分類される物語の語りと、「オーラルヒストリー」に分類される歴史語りの、両方の性格を併せもった文体になっているようである。しかし同時に留意すべきは、語り手であるアスンタとフリアン姉弟は、そのようなジャンル区別を自らはしておらず、実際の経験に基づく語りも口承文学の語りも、スペイン語の「お話、短編小説」を意味する単語 *cuento* に由来する、*kuñtu* 「物語」であると (アイマラ語で) 位置づけている [藤田 2014]。本稿では、日本語での用語の混乱を避けるために、一つ一つの「*kuñtu*」に「物語」、

<sup>1</sup> 以下の原文対訳テキストにおいては、アイマラ語では *mayodromo* と発音されている。

「話」または「語り」として言及することにする<sup>2</sup>。

一般的に南アンデス高地では、高原部 (altiplano) でアイマラ語が話され、溪谷部 (valle) でケチュア語が話されるという大まかな傾向がある<sup>3</sup>。しかし、ラパス県では、高原部に隣接する溪谷部でもアイマラ語が話される。そしてこの溪谷部のアイマラ語は、高原部のアイマラ語と言葉づかいをやや異にするとと言われることが多い。これまでに公になってきたのは高原部のアイマラ語が圧倒的に多く、本稿をはじめとする一連のテキストを通じて、溪谷部のアイマラ語の実態が明らかになることは、言語の細やかな地域毎の差異を解明するのに役立つのではないかと考えられる。

今回の原文対訳テキストは、フリアン・タピアから 2012 年 3 月 24 日に、そしてアスンタ・タピア・デ・アルバレスから 2012 年 11 月 18 日に筆者が録音した音声記録に基づいている (それぞれ録音整理番号 JT20120324\_c1 および AT20121118)。2004 年から筆者はユーバンパ村のアスンタ・タピアのもとを訪れていたが、2009 年から彼女の孫娘や娘の同席のもとで聞き取りをはじめた。2012 年 11 月には初めて、彼女とその娘と孫たち、そしてひ孫も連れて家族でキリワヤ村を訪れ、弟のフリアン・タピアと会見した。その際にフリアンから教えてもらった話の一つが、本稿で提示する最初の語りである。その後、同年の後半に筆者がアスンタと話していた際に、この時のことが話題になり、彼女に話を覚えているかどうか尋ねたところ、彼女が同じ物語を語ってくれた。これが本稿で提示する二つ目の語りである。興味深いことに、このアスンタにより語られた内容は、弟のフリアンによる語りより短いにもかかわらず、フリアンが語った中には存在しなかった内容が含まれている。この点についても、語りの特徴として III 章で検討する。

なお、この調査は、地域の伝承者として名声を確立している人を探し出してなされたものではない。筆者は、アスンタの娘ベアトリスや、その息子や娘たちと 2003 年に知り合っている。アスンタとも 2004 年には知り合っており、それから毎週末のように、ラパスやエルアルトの街中に住む家族を連れて、リオ・アバホ溪谷のアスンタの家へと下りるようになっていたが、彼女から様々な事柄を、特にアイマラ語で話してもらえるようになるまでには、それからさらに 5 年以上の年月が経っている。そして、それから 10 年以上にわたりアスンタより、毎年少しずつ土地の伝承や、その時点で家族で問題になっていた事柄や、昔の思い出について語ってもらってきた。彼女はこの家族のなかで知恵と経験のある存在であり<sup>4</sup>、魂の呼び戻しや、気候に関する (例えば雹を回避する) 唱えごとや、脂肪吸い魔 (*k'arisiri*) による被害からの回復や、神々へ供え物をする儀礼チャリヤ (*ch'alla*) など、基本的なアイマラの儀礼については、外から呪術師を呼ばずに彼女自身がこなしてしまう。しかし同時に、このアイマラの村においても、彼女の家は比較的貧しく、近くのメカパカ市にある亡き夫の実家からもやや軽んじられており、そのことについては常に皆で不平を言っている。村の中での他の人々との交流も活発ではない。筆者がアスンタと仲良くなったことについても、この家族から驚かれてきた。ある時期からアスンタは筆者のことを「息子」であると言い始め、位置づけとしては娘のベアトリスの「弟」であり、日本に出稼ぎに行っていることになっている。その意味で、ここでの様々な語りの聞き取りは、かなり偶然の積み重なった長期の人間関係の展開のなかで実現しているものである。

また、この家族にとって、ユーバンパとキリワヤの間を行き来することは、あまり楽なことではない。弟のフリアンは、公共事業に参加するためにリオ・アバホに出て来ていることが時折あったようで、その際に筆者もアスンタの家で顔を合わせたこともある。だが、アスンタがキリワヤ村のフリアンの家を訪ねたのは、筆者とともに家族全体で行った二回だけであり、それまでもかなり長いことキリワヤ村へは行っていないと述べていた。筆者がいる時期を利用して親戚付き合いが活発になり、筆者はその機を捉えてアイマラ語の語りを録音させてもらっている。この調査は、この家族のなかで面白がられ、協力してもらったなかで実現している。

<sup>2</sup> 日本語の語り理論においては、「かたる」と「はなす」のあいだに重要な差異があることが考察されてきており [坂部 2008[1990]]、この用語ではその差異が捨象されてしまうという限界もある。

<sup>3</sup> また、湖や河川の流域を中心とした一部の地域でウル系言語が話されている。

<sup>4</sup> これはアイマラ語では *chuymani* (< *chuyma-ni* [心・をもっている]) と呼ばれる。

本稿で示す語りは全てアイマラ語でなされており、これをアンデス・スペイン語（castellano andino）および日本語へ対訳した。録音の聞き起こしは、筆者も参加するラパス市の先住民知識人団体アンデス・オーラルヒストリー工房（Taller de Historia Oral Andina, THOA）のフィロメナ・ニナ・ワルカチョ（Filomena Nina Huaracacho）の協力の下で、録音を二人で聞き直しながら一言一句を確認し、また主要な箇所のアンデス・スペイン語への翻訳も確認した。以下、Ⅱ章では、フリアンとアスンタそれぞれの語りのあらすじを示し、Ⅲ章では、語りの特徴を検討し、Ⅳ章においては、アイマラ語の表記やアンデス・スペイン語への翻訳について述べたのちに、原文対訳テキストを掲げる。Ⅴ章において、議論のまとめと今後の展望を述べる。

## Ⅱ 語りのあらすじ

### Ⅱ-1 フリアン・タピアによる語り

母親が話してくれたのだが、グメルシンダ・メンディサバル・パラシオスという女領主がアイマラの人々を働かせ、週にアシエンダのために3日、自分たちのために2日働くことになっていた。俺のじいさんはアシエンダではない共同体の人間だったが、領主はじいさんがアシエンダの仕事をしないことが不満で、夜になると立ったまま横になれない牢に閉じ込め、昼になると馬の尻尾に括りつけて虐待した。そこで、俺のばあさんがラパス市に住む姉妹を訪ね、結婚相手の軍人（大佐）に事情を話し、助けを求めた。大佐は自分が行こうと言い、これこれの日に白い馬に乗って行くから、よく見て待っているようにと告げた。大佐は実際にその日のその時間に馬できらびやかな音を立てながら現れた。川まで下りてから、アシエンダの家まで上ってきて、俺のばあさんは迎えに下りていった。アシエンダ領主は、大佐が俺のじいさんの家族だと知って、アシエンダの下家に迎え入れて食べ物や飲み物を大いに振る舞った。急に領主はじいさんを虐待することを止め、牢の鍵を開け、繋がれていた縄を解いた。大佐は一晩泊まり、上のムルムルニの家の方でも過ごし、領主にじいさんを虐待しないようにと言い置いて、また、共同体の人間がアシエンダの仕事をする必要はないと念を押して、ラパスに帰っていった。それから虐待はなくなった。

### Ⅱ-2 アスンタ・タピア・デ・アルバレスによる語り

私のおじいさんはいつもアシエンダの領主に罰せられて、食事もなしで牢の中に立たされていた。おばあさんが、ラパスに住む姉妹のカルミーナを訪ね、その夫の大佐と息子と会い、領主が自分たちを罰し、自分たちの共同体の土地を取り上げようとしているのだと文句を言った。大佐は、白い馬に乗って、コリャーナからタカチャの村を通して自分が出向こうと言い、実際にやって来た。おばあさんたちは桃やリンゴなどの果物を持って迎えに行った。領主は大佐を自分の家へと案内し、おじいさんを牢から出してやった。大佐は、自分の家族だからおじいさんを罰するなと言いき、それから罰せられることはなくなった。

## Ⅲ 語りについての考察

本章では、まずここで提示する語りの種類（ジャンル）や性格について、次にこのテキストの語り自体がもつ特徴について、それからこのテキストのアイマラ語について考察する。

ここでのタピア姉弟による語りは、かつてキリワヤに存在したアシエンダにおいて、その女領主グメルシンダ・メンディサバル・パラシオスがタピア姉弟の祖父を虐待しており、姉弟の母親が娘の結婚相手の軍人に助力を頼んで、この祖父への虐待を止めさせるというものである。家族とこの軍人（大佐）の関係はかなり密であつたらしく、これに続いてフリアン・タピアが語った別の話においても、同じ軍人が登場人物として現れる。

この語りは何よりもまず、アシエンダとアシエンダ領主による抑圧に対する、アイマラの人々の抵抗の物語である。アシエンダにおける労働や、アシエンダと先住民の独立共同体の関係などについても、具体

的な描写を通じてその実態を知ることができる。

しかし同時に、留意すべき複雑さが幾つかある。アイマラ語圏では、「ペドロ・ウルティマラ (Pedro Urtimala)」というトリックスター的な主人公が、アシエンダ領主や教会神父などを手玉にとって鼻を明かす、という物語が広く知られており、筆者も、アスンタ・タピアの夫の親族のもとで使用人をしていたペドロ・サラビア・パロミーノ (Pedro Saravia Palomino) から、幾つかこのペドロ・ウルティマラの物語を録音している (未公刊)。ここでのアシエンダ女領主による横暴を阻止する話も、アイマラの家族が人脈を巧妙に駆使して力の強い支配者に抵抗するという点で、ペドロ・ウルティマラの物語を彷彿とさせる。しかし、ここでの話は、アイマラの家族がアシエンダ領主に対抗するために、近代国民国家機構の主軸を成す軍の大佐 (*kurunil/coronel*) に助力を依頼するという点で、先住民と支配層が敵対するという単純な図式になってはいない。本稿でとりあげる話に続いてフリアン・タピアが語った別の話においても、このタピア姉弟の家族の中のトリックスター的なおじ (*tjyu/tío*) が、この軍人と組んで鉱山開発をしようとする展開がみられ、そのために呪術師に依頼して山の霊を呼び出し、儀礼をとり行う。ここでも、アイマラの人々が資本主義の下で展開する経済活動に積極的に進出しようとしており、アイマラの人々が抑圧されるばかりの存在ではなかったことが伺える。さらに言うと、このキリワヤのアシエンダとタピア姉弟の家族の関係は敵対ばかりではなかったようで、姉のアスンタ・タピアはこの女領主の晩年の支え役として側についていた時期があり、筆者はこの時の彼女の経験についても長い語りを録音している (未公刊)。このような、具体的な家族の生活や活動を通して、アイマラ社会と支配階層のあいだに存在した複雑な社会関係が垣間見えるのも、口承の語りを聞いていく一つの醍醐味と言えるのではないだろうか。

このフリアン・タピアとアスンタ・タピア・デ・アルバレスによる二つの語りを比較検討すると、両者のあいだに重要な強調点の違いが存在することがみえてくる。弟のフリアンを訪問して話を聞いた後で、数カ月たってから姉のアスンタにも語ってもらって録音しているのだが、アスンタの語りはごく短いにもかかわらず、弟の話をただ反復しただけではない。幾つか例を挙げると、フリアンはおばあさんの姉妹の名前を出していないが、アスンタはこれがカルミーナ (*Karmina/Carmina*) であると述べている。また、フリアンは大佐が馬に乗ってくる描写を詳細に展開するが、アスンタはラパスからどのようなルートを通してキリワヤにやって来たのかについて詳しく説明している。さらには、フリアンはアシエンダ領主による虐待の手段を詳細に説明しているが、アスンタはキリワヤにやって来る大佐を迎えに行く際にどの果物を持っていったかについて重点を置き、果物を中心とした地元の生産活動と生活を重視した語りになっている。これはおそらく、姉のアスンタもこの話を幼少期から伝え聞いているために、自分の語りの文脈に置き直して語っているのであろう。ただし、それぞれが話を元から知っているのではない場合でも、語り手の関心に応じて語りの強調点の置き方が変わり、それによって同じ話であっても語りにバリエーションが生まれてくるのではないかと考えられる。

ただし同時に、重要な共通点も存在する。大佐が白い馬 (*janq'u kawallu*) に乗ってきたという視覚的に印象深い点はフリアンとアスンタの両者が述べており、またキリワヤに入ってくる際の地形が斜面 (アイマラ語で *parki* と言い、スペイン語の *parque* に由来すると考えられる) になっており、一旦川へと下ってから上ってこなければならないという点も、二人の語りで踏まえられている。

さて、本稿で示すテキストのアイマラ語の語りの文体にも、幾つかの特徴が認められる。まず前提として踏まえる事柄として、アイマラ語においては、過去のことを語る際に、自分が直接体験したことであるのか、それとも人から聞いた話すなわち間接経験であるのかを、文法的に区別して語ることが要請される。動詞の時制 (*tiempos verbales* : 以下動詞 *saraña*[行く]の3人称の活用でそれぞれの例を示す) においては、単純形または現在過去形 (*tiempo simple* または *tiempo presente-pasado* : *sari*) と呼ばれる形式と、近接過去 (*pretérito remoto cercano* : *sar-än(a)*) が直接経験で用いられ、遠隔過去 (*pretérito remoto lejano* : *saratayn(a)* または *sarat-än(a)*) が間接経験で用いられる (カッコは場合によってその母音が脱落することを示す)。これは言語学用語で言えば、証拠性 (*evidencialidad*) の表示が義務であるということになる。

しかし、動詞の時制の区別がそのまま語りの文体の区別になるわけではない。これらの動詞の形式とそ

の他の要素が、複数組み合わせることで文体が構成される。この家族の語りについてみると、タピア、藤田 [2020] およびタピア、サラビア、タピア、藤田 [2015] に見られるように、蛇や蛇と結婚する娘が主人公となるようないわゆる「物語」部分においては、上記の動詞の遠隔過去の形式に加えて、動詞を単純形で活用させたうえで、「言う」を意味する動詞 *saña* の 3 人称での活用形を続ける、すなわち「～だと言う、～だそうだ」という表現形式が組み合わせられて語られる。たまに遠隔過去の形式に *saña* の 3 人称での活用形が続くこともある。これに加え、さらに動詞の推量の形式 (inferencial : *sarchi*) が組み合わせられる。これは以下のような箇所から確認できる (時制を分かり易くするため、動詞の活用語尾の部分に太字にして示す) ——

Ukat jichhax kuna uray mistsuñapāx**chi** ukan, ukax mistsunxarakiw **siy**, mistsunxarakitaynay.

(Después ahora [a] qué hora pues debería salir ahí, ese ya ha salido, dice pues, ya había salido pues.)

(そしてさて、何時かに[若い男は]そこを出たはずだ、そいつはもう出ていったと言うんだ、もう出ていったのだとさ。)[タピア、サラビア、タピア、藤田 2015:122-123]

これは蛇が夫によく似た姿となって女性を訪ね、一夜を過ごした後で出ていく場面である。このような文法形式の組み合わせについて、筆者は、物語の骨格を伝承された過去の話として語ったうえで、細部を推量で埋めながら語っていくという形式なのだと理解している。ただし、伝聞過去の二つの形式と推量の形式は、語りの骨格と細部というふうに明確に区別されて使われているとは言えないことも多く、上の例のように一つの箇所に三つの形式が同時に用いられることもある。

本稿で以下に提示するテキストにおいても、姉弟が直接体験した話ではなく、母親から聞いて育った話であるため、遠隔過去と動詞 *saña* を組み合わせた伝聞の文体が主体となっており、そこに推定を示す形式 (inferencial、接尾辞-*ch(i)*) が組み合わせる。その意味では「オーラルヒストリー」ではあっても、動物たちが生きて動いていた「時代」の物語としての「口承文学」と同じ文体が用いられている。これは、テキストの全編を通じて見いだせる特徴であり、以下のような例が挙げられよう——

[...] ukat chhāx purine**ch** ukat akaruw ist... ukjam awis**ch** ukat ukūru jutañapaki ukūrus uñch'ukitān **siy**,

([...] después ahora llegaría, después aquí este... así avisaría, después ese día ha tenido que venir nomás, hasta ese día había mirado [esperado], dice,)

(そしてさて着いたんだろう、それからここにその…こう連絡したんだろう、そしてその日にもう来るはずだった、)

これに対し、自分が直接経験した内容についての語りにおいて、どのような文体的な特徴が見られるかは、いまだに十分に明らかになっていない。これまでアイマラ語のオーラルヒストリーで原文対訳形式で公刊されているものとしては、Briggs and Dedenbach-Salazar eds. [1995] および Spedding y Colque [2003] がある<sup>5</sup>。Briggs and Dedenbach-Salazar eds. [1995] は、ペルーのプーノ県のチュクイト (Chucuito) において人類学者ハリー・チョピック (Harry Tschopik) がかつて集めた資料の中にある、アイマラ語のモノリンガルであったマヌエラ・アリ (Manuela Ari, 1940 年代末に年齢は 60 代であったとされる) の自伝を、再編集して公刊している。そこでは、習慣的行為 (habitual) を示す動詞接尾辞-*iri* が、背景となる行為についても出来事についても、広範囲に用いられていることが指摘されている [Briggs and Dedenbach-Salazar eds. 1995, p.13]。Spedding y Colque [2003] は、ユンガスで生まれ育った年配の女性フェリパ・カイエ (Felipa

<sup>5</sup> これらのアイマラ語でのオーラルヒストリーの取り組みは、いずれもペルーのクスコでケチュア語のオーラルヒストリーに取り組んだリカルド・バルデラマ (Ricardo Valderrama) とカルメン・エスカランテ (Carmen Escalante) の仕事にインスピレーションを受けていることは指摘しておきたい。特に Spedding y Colque [2003] はその題名も、Valderrama y Escalante [1992] を意識していることが見てとれる。

Calle) のアイマラ語による語りを提示している。同書には文法的特徴についての指摘はないが、提示された語り全体を見てみると、単純形による語りが支配的で、習慣的行為を示す動詞接尾辞-*iri* や近接過去が、語りの背景となる継続や反復を含む内容（スペイン語であれば動詞の線過去が用いられそうな事柄）に用いられているようだ。

現段階で筆者による録音から見える暫定的な特徴としては、習慣的行為を示す動詞接尾辞-*iri* が多用され、また、数は少ないが、要所で近接過去が用いられるという形式をとることが確認できている。これは Briggs and Dedenbach-Salazar eds. [1995] が指摘する特徴とほぼ重なる。まずは近接過去が用いられる箇所であるが、これは話の語り始めて用いられている（該当する接尾辞を太字で示す）——

Uka paqallq maranit ukan trawajwayta ukat..., padrinuxax wali qhur<sup>u</sup>nw... janiy, marinaxa wali qhur<sup>u</sup>nw, parinuxa suma jaq<sup>i</sup>nw, wali suma jaq<sup>i</sup>nw,

(Eso siete años tenía y ahí he trabajado, después... mi padrino bien malo era... no, madrina bien mala era, padrino buena gente era, muy buena gente era,)

(その私は7歳で、そこで仕事をしていたんだ、そして…私のパドリーノ[カトリックの親族関係上の代父]はひどく性悪だったんだ…ちがう、私のマドリーナ[代母]がひどく性悪だったんだ、パドリーノは良い人だったんだ、とっても良い人だったんだ、)

これは、小さい頃にラパス市内の商人の家に預けられ、そこでいわゆる「奉公」のような形で手伝いをしていた際に、家長が日本人で、妻がボリビア人であったことを説明している、語りの冒頭部分である。ここでは、語りの冒頭で舞台を設定するにあたって、近接過去がその役割を果たしていると言えるだろう<sup>6</sup>。また、併せて注目されるのは、それ以降の語りにおいては単純時制が習慣的行為と組み合わせて用いられており、両者の役割分担がそれほど明らかではないということである（該当する接尾辞を太字で示す、-*iri* 以外の強調箇所は全て単純時制の活用形である）——

Uka yirasiskixa, ukanakaru. Yast tat iriruxay walipin<sup>i</sup>riw, irirux jiwarayasiskiy, chiiw<sup>i</sup>tas akjam pasawäpxit nanakaru, akjam sapxarakir<sup>i</sup>t, jani chukapkituti, k'uchitunamak sarapxir<sup>i</sup>t,

(Eso se están guerreando ahí. Ya tata heridos hartos siempre, heridos se están matando, chiiw diciendo así nos pasa [la bala] a nosotros, así sabemos decir, no nos ha chocado, como por el rinconcito nomás sabemos ir,)

(その戦争をしているんだ、その辺りで。もうあのね、負傷した者たちが本当にたくさんなんだよ、負傷した者たちが死んでいっているんだ、ヒューンと音を立ててこう私たちの横を[弾丸が]通り過ぎていくんだ、こう言っていたんだ、私たちには当たらなかった、物陰や角を伝って進んで行くからね。)

これはグアルベルト・ビヤロエル（Gualberto Villarroel）大統領（在任 1943-1946 年）が最終的にラパス市のムリーヨ中央広場で首を吊るされることになる政変において、当時アスンタ・タピアが奉公に出ていた日本人の家で、妻とともに兵士たちへの物資の支援を行っていた記憶を語る一節である。

さて、本稿で示すフリアン・タピアの語りにおいては、冒頭で遠隔過去や動詞 *saña* を用いた形式に、習慣的行為を示す接尾辞が組み合わせて使われる箇所が、繰り返し現れてくる（該当する接尾辞を太字で示す）——

<sup>6</sup> タピア、サラビア、タピア、藤田 [2015] では、話の後半で家族が実際に経験した（現実）話が出てくる。その箇所では、ここで提示するのと同様に近接過去が用いられている [タピア、サラビア、タピア、藤田 2015:227-228]。しかし、話題はすぐに、そこで話題になっている娘のおばから聞いたという伝聞にもとづく話へと移行するため、十分に近接過去の形式の役割を確認できるとは言えない。

[...] patruna Gumir... Gumercinda Mendizábal Palacios satātānaw, patrón, patrona, aynachanx. Ukata isti... jaqinakaru trawajayirīn siy, patrunatakixa payūruw lurañayir siwa,

([...] la patrona, Gumercinda Mendizábal Palacios se había llamado, patrón, patrona, en abajo. Después esto... a la gente sabía hacer trabajar dice pues, para la patrona, dos días se tenía que hacer, dice,)

([アシエンダの]女領主がグメルシンダ・メンディサバル・パラシオスという名前だったそうだ、領主、女領主が、その下の方のな。それからその…アイマラの人々を働かせていたと言うんだよ、女領主のためには二日しなければ[働かなければ]ならないようにさせていたと言うんだ。)

まだ確言するには尚早であるが、もしかすると本稿のテキストは、いわゆる伝承された物語と、自分が直接体験した経験談とのあいだの、中間的な文体を構成していると言えるのかもしれない。この点については、本稿で示すアスンタ・タピアの語りにおいても、冒頭は近接過去から始められ、習慣的行為を示す接尾辞-iri も用いられつつ、これが伝聞を示す動詞 *saña* と組み合わせられている。これも、伝承された物語と直接体験した過去についての語りの、中間的な文体となっていると言えるのではないか。

これは、藤井貞和が、古典日本文学について、上代の『古事記』などの叙事文学が過去の助動辞の「き」を基調にし、平安時代以降の物語文学の文体が助動辞「けり」を基調にしていることから、前者をフルコト、後者をモノガタリと文体上の特徴から大きく分類したことを思い起こさせる〔藤井 1987、特に第五章を参照〕<sup>7</sup>。さらには、助動辞「けり」は「き」に「あり」が接続して音韻変化を生じたものであるから、「過去から現在に流れている時間」を示すとした上で、物語文学に、(1) 大枠として過去のことを語ることが助動辞「き」を用いて冒頭などに示され、(2) 物語の中を刻々と流れる現在に過去の時間が流れ入ることを助動辞「けり」で示し、(3) 物語全体が過去であることを語り手の立場から伝承として語っていることを示すために助動辞「けり」が用いられる、という文体的特徴があることを藤井は提示する〔藤井 2016:49-51〕<sup>8</sup>。ここでは、複数の時間と語りの層の組み合わせとして文体が成立していることが示唆されており、ここでのアイマラ語の考察もその方向を目指そうとしている。

上のアイマラ語の口頭伝承の文体に戻り、現時点での文体についての考察結果をまとめるならば、伝承された物語を語る際と、自分が直接経験した過去を語る際に、大きく分けて二つの文体の極が存在し、そのいずれも複数の文法形式が組み合わせられてその文体を形成している。そしてさらに、それらの二つの文体の中間形態と言えるような語りの形式が存在することになる。この観察が的を射ているかどうかは引き続き調査と考察が必要であり、また、では夢の話をする場合にはどうなるかなど重要な未検討の領域も存在するが、いずれにしても、アイマラ語による口承の語りにおいては、研究者が導入したジャンル区分としての「オーラルヒストリー」と「口承文学」が、語りの文体としても、また（I 章に述べたように）語り手自身の意識としても、明確に区別されているわけではない。実際の語りの文体と言語的特徴や、語り手自身の見方と意識（パースペクティブ）から出発して考えようとする取り組みが必要であろう（ケチュア語におけるこのような取り組みについては Adelaar [1997] を参照）。

#### IV 原文対訳テキスト

以下、音声の聞き起こし・文字化と翻訳の過程で、特に留意した点を挙げる。音声上で、実際に発音されているかされていないか判断が難しい音があり、それに対応する文字は丸カッコ ( ) に囲んで示す。文脈が分かり易くなるように筆者が語や表現を補っている際は、大カッコ [ ] に囲んで示している。XXX は

<sup>7</sup> 藤井は、平安時代以降の漢文訓読（[訓点語]）において（物語文学の和文の世界と対立して）「き」が多用されるのを、古い叙事文学の伝統を引継いだのではないかと考えている〔藤井 1987:233〕。

<sup>8</sup> 藤井は、時枝誠記の言語学による意味を担う「詞」と機能を担う「辞」の区別に基づいて、一般的に文法で助動詞と助詞と呼ばれるものを、それぞれ助動辞と助辞と呼ぶべきであることを提唱しており、ここでもその用語法を踏襲している。



不明箇所を示す。なお、IV-1「フリアン・タピアによる語り」のテキスト内における番号と小見出しは、筆者自身がテキストの内容のまとまりに対して付したものである。

アイマラ語の聞き起こしにおいては、聞く者によって判断が分かれる点が存在する。ある情報について話者の確証を示す文接尾辞 (*sufijo oracional*) は *-wa* であり、頻繁に最後の母音が脱落して *-w* となる。しかし、この *-w* の後ろに、「そして」を意味する *ukat* や「そのように」を意味する *ukjam(a)* など、*u* から始まる単語がくる場合には、直前に *-w(a)* があるかないかの判断が相当に困難なときがある。特に、ここで筆者が録音している話し手たちの場合は、この *-w(a)* を入れないことが他の地域のアイマラ語話者よりも多いようであり、むしろ *-y(a)* という文接尾辞が多用される傾向がある<sup>9</sup>。それを踏まえ、一緒に音声を聞いたフィロメナ・ニナの判断に反して、筆者が *-w(a)* を入れなかった箇所が幾つかある。いずれにしても、その箇所を含め、*-w(a)* の有無についての判断は多分に恣意的である。

口頭の語りにおいて、文の切れ目を判断することはそれほど簡単なことではない。本テキストにおいても、プント（ピリオド）の使い方は多分に恣意的である。特に同じ内容を繰り返している場合には、その間で文を区切らず、コマ（コンマ）で繋ぐことにした。コマは、基本的に話者が一呼吸おいている箇所に入れているが、それ以外にも文の構造を分かり易くするために入れている箇所がある。

スペイン語への訳については、アイマラ語からの直訳に近い訳を示す。これに加え、訳の確認の途中でフィロメナ・ニナから提示された訳も随所に活用しており、これは厳密なアイマラ語の直訳ではない場合もある。これらはともに、アンデスの先住民言語との接触のなかで形成されたアンデス・スペイン語 (*castellano andino*) の特徴を有しており、このタイプのスペイン語で訳すべきだということがアンデス地域においては現在では主流の見解になっている [Espejo, Arnold y Yapita 1994; Spedding y Colque 2003]。また、アイマラ語を学ぶ者にとっては、このようなスペイン語による訳の方が有用であると考えられている。本稿でも、この考え方を踏襲している。また、日本語への訳においても、語を形成する全ての要素を可能な限り訳出しようとしている。

上述したように、アイマラ語において、直接経験したのではない伝聞した過去の内容は、遠隔過去の動詞の活用（屈折）の形が用いられる場合もあれば、伝え聞いた内容の後ろに「言う」を意味する動詞 *saña* を入れることにより、日本語の「～というんだ」に相当するような表現となる場合もある。本稿では、前者を「～そうだ」、後者を「～と言うんだ」と訳すことにした。

習慣的行為（いつも～している）を表現する際に、ボリビア・アンデスのスペイン語では、助動詞として *soler* ではなく *saber* が用いられる<sup>10</sup>。以下のテキストでは、スペイン語訳の随所にこの助動詞 *saber* が出現するが、これはそれ以外の地域でこの助動詞がもつ「～できる、～するノウハウをもつ」という意味ではなく、「いつも～している」という意味である。

アイマラ語の単純時制または現在過去時制と呼ばれる動詞の活用の形は、現在のことも近い過去のことも示すことができる。これは、スペイン語では現在形と現在完了形でそれぞれ訳されることが多く、ここでもそれに従っている。日本語でも現在と過去を使い分けて訳しているが、スペイン語の場合も日本語の場合も、訳におけるその区分は多分に訳者の恣意に基づいている。

接尾辞の呼び名は Layme [2004] に従っている。また、以下のテキストにおいては注釈を様々につけているが、アイマラ語を初歩から解説することは本稿の目的ではない。ただし、学習途上にある者にとって参考になるであろうと思われる箇所には注をつけるように心がけた。筆者によるボリビアのラパス県溪谷部のアイマラ語の記録は一定の分量に上っており、後々にこのアイマラ語の辞書と文法を編纂する際の準備作業として注をつけている面もある。

<sup>9</sup> THOA のペドロ・ベラスコ (Pedro Velasco) は、特にリオ・アバホ溪谷のアイマラ語の特徴として文接尾辞 *-y(a)* の *-w(a)* に対する優勢が指摘できると発言している (2023 年 3 月 23 日における同組織の定例会議にて)。

<sup>10</sup> この特徴はスペイン王立アカデミーの *Diccionario Panhispánico de Dudas* によればアメリカ大陸のアンデス地域に特に顕著だとある (<https://www.rae.es/dpd/saber>)。

## IV-1 フリアン・タピアによる語り

### (1) 話の冒頭

Patrunanaka kunjams nayraxa sufriyiritānaxa

Los patrones, cómo antes había sabido hacer sufrir

アシエンダ領主たちが、どのように昔は苦しめていたか

istinakar... jaqinakaruxa<sup>11</sup>, uk kuñtām.

a estos.... a la gente, eso te contaré.

その...アイマラの人々のことを、それをお前に話してやろう。

Nāru kuñtawāpxarakituwa, mamaxa kuñtawayitu,

A mí me han contado también, mi mamá me ha contado,

俺も話してもらったんだ、俺の母親が俺に話してくれたんだ、

ukata ukat yatiskta.

por eso de eso estoy sabiendo.

だからそれについて知っているんだ。

### (2) アシエンダと共同体の労働

Akana istipi,

Aquí este pues...

ここでは、あれだよ...

patruna<sup>12</sup> aka Min... Gumerinda Mendizábal Palacios satātānaw,

la patrona, este Min... Gumerinda Mendizábal Palacios se había llamado,

[アシエンダの] 女領主がグメルシンダ・メンディサバル・パラシオスという名前だったそうだ、

patrón, patrona, aynachanx<sup>13</sup>.

patrón, patrona, en abajo.

領主、女領主が、その下の方のな。

Ukata isti... jaqinakaru trawajayirīn siy,

Después este... a la gente sabía hacer trabajar, dice pues,

それからその...アイマラの人々を働かせていたと言うんだよ、

<sup>11</sup> アイマラ語の *jaqi* は「人」という意味だが、この文脈ではアイマラの人々を指す。ケチュア語でも「人」を意味する *runa* が同様にケチュアの人々を指すのに用いられる。

<sup>12</sup> アイマラ語では単語が必ず母音で終わるという特徴があり、スペイン語の子音終わりの単語には必ず末尾に *a* が付け加えられる（例えば *La Paz* は *Lapasa* となる）。従って「領主」を意味する *patrón*（男性形）／*patrona*（女性形）は、アイマラ語に入るとともに *patruna* となり、*-a* で終わっているからといって女性であるわけではない。ここは、実際に領主が女性であったため、それをスペイン語と日本語の訳に反映させている。なお、本来は存在する語末の母音が様々な理由で脱落することもあり（*caída vocálica*）、その結果として単語が子音で終わる形で発音されることがある。

<sup>13</sup> この *aynachanx* の前に何か音が入っているようだが、判然としない。*uka* 「その」であろうか？

フリアン・タピアはキリワヤ村の中央広場の脇に家をもっており、この録音もその家の台所で彼の妻が料理をしている横で行われている。キリワヤのアシエンダは、この中央広場から川の方へ下っていったところにあったとされる。この地理的な位置関係が、ここでの表現に反映している。

patrunatakixa payüruw lurañayir<sup>14</sup> siwa,  
para la patrona, dos días se tenía que hacer, dice,  
女領主のためには二日しなければ「働かなければ」ならないようにさせていたと言うんだ。

istitakixa jiwasatakixa, jupatak jaqitakixa kimsüruraki, ukham.  
para este... para nosotros, para él, para la gente tres días también, así.  
その...我々のために、彼に、アイマラの人々には三日、そんなふうのだ。

Ukjam lurapxirītān taqi jaqi, ü.  
Así había sabido hacer toda la gente, sí.  
そういう風にしていてそうなんだ、アイマラの人々は皆、うん。

Ukjam lurayirītān patruna ukat, chhā akan akawjitan,  
Así había sabido hacer hacer la patrona, y ahora aquí, aquicito,  
そのように女領主がさせていたそうだと、そして今「で言うところの」、ここで、すぐそこで

Mulumulu<sup>15</sup> sataw khāwjitan.  
Mulumulu se llama, allacito.  
「ムルムル」と呼ばれる、すぐそこで。

Uka awichaxapī ukā achachilaxa. Achachilaxaw uka.  
Eso mi abuela es pues, eso es mi abuelo. Mi abuelo es eso.  
それは俺のばあさんなんだよ、[いや] 俺のじいさんだ、俺のじいさんだそれは。

Ukaxa kumunātānapī<sup>16</sup> ukax, uka uraqi, kumuna.  
Eso había sido comunidad pues, eso, esa tierra, de comunidad.  
それは共同体だったそうなんだよ、それは、その土地は共同体だ。

Ukat kumunanakax janiw asint lurirīkānt siwa.  
Por eso los comuneros no hacían trabajo de la hacienda, dice.  
だから共同体の者たちはアシエンダの仕事はしなかったと言うんだ。

Janiw asint lurirīkānt siw kumunanaka(x).  
No sabían hacer cosas de la hacienda, dice, los comuneros.  
アシエンダのことは普段やっていなかったというんだ、共同体の者たちは。

Indipidintīn siw istita, ü, patrunata.  
Eran independientes, dice, de este..., sí, del patrón.

---

<sup>14</sup> 音声は *lurañir* と聞こえるが、文脈から *lurañayir* が短く発音されているのだろうと判断して、そのように記す。これはスペイン語に直訳すると *ha sabido hacer que se tenga que hacer ...* (～し・なければならぬ・ようにさせていた・ものだった) となるが(最初の *hacer* が使役、次の *hacer* が[する]である)、やや煩雑になるため、よりシンプルな訳を採用している。

<sup>15</sup> この *Mulumulu* というのがキリワヤのアシエンダ(大農園)の名称である。

<sup>16</sup> ここで「共同体(*kumuna/comunidad*)」というのは、アシエンダに取り込まれてない、アシエンダ外部の独立した共同体ということである。

独立していたというんだ、あれから...、うん、領主からは。

Ukat ukjamaw uka istiskiri siw, luraskiri...

Después así eso sabe estar estiendo<sup>17</sup> dice, sabe estar haciendo...

それからこう、いつもそれをあれしているというんだ...いつもあれしていて...

jupa janiw luririkit si.

él no sabe estar haciendo dice.

彼は「アシエンダの労働を」いつもしていなかったというんだ。

### (3) アシエンダ女領主による祖父への虐待

Ukat jichhax, ukampi jan kunfurmixänt siy patrunax.

Después ahora, con eso ya no era conforme, dice, la patrona.

それからさて、そのことにもう不満だったというんだ、女領主がな。

Ukat istxän, wali liy<sup>18</sup> katxatasxän<sup>19</sup> siy,

Después ya han estido... mucho se hacían enemigos ya, dice,

それからもうあれしたんだ...たいへんお互いに対立をしたというんだ、

wali awusañ munxän si, awusxän siya.

mucho quería abusar ya dice, abusaba ya dice pues.

「俺のじいさんのことを」ひどく痛めつけようとしたというんだ、もう痛めつけていたというんだよ。

Ukat llawintayanin<sup>20</sup> siw isti apaqayän siw,

Después venía para hacerlo encerrar, dice, este... lo hacía llevar abajo, dice,

そして閉じ込めさせにきたというんだ、その.....下へと連れていったというんだよ。

aynach<sup>21</sup> uyuru<sup>22</sup> kalawusu utj,

abajo en el cercado hay un calabozo,

下の外から囲われた場所に牢があつたんだ。

<sup>17</sup> アイマラ語では、何か単語がすぐに浮かばないときに「あれする」という言い方で、*iñchhiña* という動詞が存在しているが、これはスペイン語では *este* を元にした *ester* という動詞になって広く使われている。また、このスペイン語の *ester* がアイマラ語化した *istiña* も頻繁に使われ、この語り手もここやその他の箇所で見えている。

<sup>18</sup> この *liy* はスペイン語の *ley* 「法律」ではなく *lio* 「紛争」がアイマラ語化したものである。

<sup>19</sup> *katxatasña* で「互いにつかみ合う」という意味になる。<*katuña* 「つかむ、受け取る」+*-xata-si* 「上方への動き (superposición) ・再帰 (reflexivo)」。

<sup>20</sup> <*llawiña* 「戸の鍵を閉める」 [Layme 2004:113] +*-nta-ya-ni-ñ* 「内側への動き (introductivo) ・使役 (causativo) ・移動 (traslocativo) ・近接過去 (remoto cercano)」。

<sup>21</sup> 上述のように、かつてのキリワヤのアシエンダは、語り手のフリアンのある場所から斜面を下った場所に位置し、そのためここでも「下」という方角とともに語られている。

<sup>22</sup> *uyu* 「庭 (jardín) 、中庭 (patio) 」／*cercado* 「囲われた場所」／*lugar donde se recoge de noche el ganado* 「[De Lucca 1987:167; Layme 2004:194]。この語り手フリアン・タピアは、以下でこの単語を「アシエンダの家 (母屋) (casa de hacienda)」だと説明しており、確かにこれも外から囲われた中にあり、文脈にも合っているようで、以下ではそのように解釈している。

phuqhatakiw jaqitaki, akjam phuqhatitukiwa.

es completo nomás (bien pequeño) para la gente, así completito nomás es.

これは人にとってもう狭いんだ、こうひたすらきついんだよ。

Janiw ukjam winkt'añjamäkis kunas akjam.

Así no se puede echar ni nada así.

こう横になることも何もできないんだ。

Ukaruw kalawusu, kalawusu, patrun kalawusup,

Ahí calabozo, calabozo, su calabozo de la patrona,

そこが牢、牢だ、領主の牢で、

ukaruw arumax llawintayir siy.

ahí de noche sabe encerrar, dice pues.

そこに夜になるといつも閉じ込めていたというんだよ。

Ukat uruxa kawalluruw wich'inkaruw<sup>23</sup> chinkatir<sup>24</sup> siya.

Después de día a la cola del caballo sabía amarrar, dice pues.

それから日中は馬の尻尾へといつも縛りつけていたというんだよ。

Ukat ukjam irpnaqir<sup>25</sup> siy, ukat aynachat mitsunwäpxi ukä(¿?)<sup>26</sup>

Después así sabe manejarle, dice, después de abajo viene saliendo (¿así?)

それからこういつも連れまわしていたというんだ、それからこの下の方から出てきて、

asint ist, uraqinaka khaysan utji, khä alayan,<sup>27</sup>

este... las tierras de la hacienda en aquel lado hay, ahí en arriba,

アシエンダのその...土地というのはあっちの方にあるんだ、あの上の方に、

uksanakanxa taqi chiqan utji ukat ukawkanak istixä,

por esos lados, por todo lado hay, después por esos lados este...

そっちの方や、あちこちにあって、そしてそっちの方にあの...

mayodromo<sup>28</sup>, uka patrunana istipa, sirvientip sañän jaqip sañän,

mayordomo, ese su este de la patrona..., su sirviente decimos, su gente decimos

マヨルドーモ、その領主のあれだよ...、召使いと我々が言う、領主の配下の者と我々が言う

<sup>23</sup> *wich'inka* 「尻尾」 [De Lucca 1987: 173]

<sup>24</sup> *chinkataña* 「一つのを別のものに結びつける」 [De Lucca 1987: 38] <*chinuña* 「しばる」 + *-kata* 「近づける動き (cercativo)」。

<sup>25</sup> <*irpaña* 「連れていく (guiar)」 + *-naqa-iri* 「あちこちへ不規則な動きを示す (oscilativo) ・習慣的行為 (habitual)」

<sup>26</sup> 明瞭に聞き取れない。 *ukjam* 「そのように」 などと言おうとして、言い切らなかったか。

<sup>27</sup> この行から、馬について説明をしようとしていて、そのためにアシエンダ領主の配下のマヨルドーモやヒラカタが乗っているものだという話が挟まれ、そこから再び語り手のおじいさんが馬の尻尾につながれていたという話に戻る。

<sup>28</sup> これは打ち間違いではなく、話者が *mayodromo* と発音している。スペイン語の *mayordomo* の語形が残りつつ、アイマラ語の音の配列が影響したのではないだろうか。次の行の *mayorum* の方が、よりアイマラ語らしい語形になっている (アイマラ語には本来 *d* の音が存在しない)。マヨルドーモの役割については、この下で語りのなかで説明されている。

ukä empleadop ukä mayorum satänwa<sup>29</sup> jilaqat sas,  
ese su empleado, eso mayordomo decía, jilaqata diciendo,  
その領主に使われているやつ、それをマヨルドーモと言って、ヒラカタとも言って、

ukanakaw ukjam lat'xatat sarir siw, kawallurx.  
esos así montado sabe ir, dice, al caballo.  
そいつらがこう乗っていつも行くというんだ、馬にな。

Ukat ukaxa achachilaxa ukarux  
Después ese mi abuelo ahí  
それからその、俺のじいさんがそこで

kawallu wich'inkaru chinkatawayir<sup>30</sup> siy, uruxa, jayp'u puriyix  
a la cola del caballo sabía amarrar dice, de día, de tarde ha hecho llegar (al abuelo),  
馬の尻尾にいつも縛られているというんだ、日中に、そして夕方に戻らせて

ukat jayp' arumax kalawusururaki ikiyxaraki siya.  
y de tarde y de noche al calabozo también ha hecho dormir ya también, dice pues.  
夕方と夜には牢で寝かせたと言いうんだよ。

Ukjam ukat, ukjam awusän siy, ukat...<sup>31</sup>  
Así después, así abusaba dice pues, y...  
こうそれから、そのように虐待していたというんだよ、そして...

(4) 祖母が姉妹の結婚相手の軍人（大佐）に助けを求めにラパスに行く  
jichhaxä, awichaxan kullakapapĩ yaqha utjatänax,  
ahora, su hermana de mi abuela pues otro<sup>32</sup> había habido,  
さて、俺のばあさんの姉妹が、もう一人いたんだそうだ、

mä... mä siñura utjatänax, akat tawaqitaw sarxän siw,  
una... una señora había habido, de aquí de joven ya se fue, dice,  
一人...一人いい年の女がいたそうだ、ここから若い頃に出ていったというんだ、

chika sarxatapänx Lapasaru.  
de pequeña ha debido ir a La Paz.

<sup>29</sup> これは動詞 *saña* 「言う」の過去分詞 (participio) である *sata* に、近接過去の屈折接尾辞 *-n* がつき、文接尾辞の *-wa* がついたものである。ちなみに *saña* の遠隔過去の形も *satayn(a)* または *satän(a)* という形になり、特にこの後者の遠隔過去の形はよく似ているが、この場合には文接尾辞の *-wa* がつくと *satänawa* と動詞の活用語尾末尾の母音 *a* が落ちないため、両者が区別できる。また、ここは「～と呼ばれる」という意味の文脈であり、その場合には *saña* の過去分詞の *sata* が頻繁に用いられるため、文脈からも判断が可能である。

<sup>30</sup> <chimuña 「しぼる」 + *-kata-way(a)-iri* 「近づける動き (cercativo) ・ついでに行われる動作 (pasativo) ・習慣的行為 (habitual)」 (カッコ内に脱落した母音を示す)。*-waya* は比較的簡単に様々な動作につくことができるため、具体的に何を意味しているということが判断しにくい場合もある。

<sup>31</sup> 次の話に行こうとして、この行で簡単にここまでの話をまとめてから、次の行で話を転換している。

<sup>32</sup> これは祖母の姉妹なので *otra* とすべきかもしれないのだが、アイマラ語話者はこのような場合に男性を指していても女性を指していても *otro* とスペイン語でも言うことが多いので、ここでの訳は *otro* としておく。

小さかった頃にラパスに行ったはずだ。

K'itasxä... k'itasxatapānay ukat Lapasana qamasxatānax.

Ya escapa... ya se ha debido escapar pues, y en La Paz se había vivido ya.

もう [村を] 抜け...抜け出したのだろうよ、そしてもうラパスに住んでいたんだそうだ。

Ukat tawaqūxchi ukjam ast(¿?) siñurāxatānay,

Después ya sería joven así, hasta había sido ya señora,

それからそしてもう大きくなっていたんだろう、そしてもう大人になっていたんだそうだ、

siñurāxatānay

había sido ya señora,

もう大人になっていたんだそうだ。

ukat uka siñurapī mā kurunilampix kasaraxatānax,

y esa señora pues con un coronel ya se había casado,

そしてその女はな、ある大佐ともう結婚したのだそうだ、

kurunilampi kasaraxatāna uka istix... awichaxan kullakapa.

con el coronel ya se había casado ese este... su hermana de mi abuela<sup>33</sup>.

大佐ともう結婚したのだそうだ、そのあれだ...俺のばあさんの姉妹が。

Ukata... jichha uka awichaxax ukā kullakapan...

Después... ahora esa mi abuela de esa su hermana...

それから...その俺のばあさんが、その姉または妹のところに...

kullakapar kijasiriw<sup>34</sup> saratānax, akat saratānax Lapasa<sup>35</sup>.

a su hermana a quejarse había ido, de aquí había ido a la Paz.

その姉妹のところに文句を言いに行ったのだそうだ<sup>36</sup>、ここから行ったのだそうだ、ラパスへ。

Ukat kijasitānax, isti...

Después se había quejado, este...

そして文句を言ったのだそうだ、その...

kullakapan ukar<sup>37</sup> puritān ukat kijasitānaw

<sup>33</sup> このようにスペイン語でも、所有形容詞と *de* を用いた具体的な誰のという要素を組み合わせることは、アンデスの先住民言語の話者のあいだでは広く行われている。

<sup>34</sup> 音声では最後の *w* が *p* の音に聞こえるか。

<sup>35</sup> 向きを示す名詞接尾辞 *-ru* がついて *Lapasaru* とならず、接尾辞なしで「ラパスに行く」という意味で用いられている。

<sup>36</sup> アイマラ語の *kijasiña* はスペイン語の *quejarse* に由来しており、これをどのように訳すかが難しい。「文句を言う」だとややインフォーマルに聞こえるが、よりフォーマルな場面で訴えをする際にもこの単語が用いられるため、「訴える」「陳情する」などの訳語も考えられるかもしれない。

<sup>37</sup> 指示語の *uka* 「それ、その」(や稀に *aka* 「これ、この」) が、所有を示す接尾辞 *-n(a)* を伴った名詞に続くと、「～のところ、～の場所」という意味になる [Gallego 2008:85]。

donde su hermana había llegado y se había quejado,  
彼女の姉妹の家に着いたのだそうだ、そして文句を言ったのだそうだ、

“ukjamaw patrunaxa awusapxit<sup>38</sup>, sintipiniw awusxapxit”  
“así la patrona nos abusa, harto siempre nos abusa”  
「こうやって女領主がわたしらを苛めるんだ、もう本当にひどく苛めるんだ」

sasina kijasitānax ukat... ukat kurunilaxa,  
diciendo se había quejado y... después el coronel,  
と文句を言ったんだそうだ、そして、それからその大佐は、

kurunilar kun<sup>39</sup> awispachax ukat,  
hasta al coronel ha debido avisar, y,  
[祖母の姉妹が] 大佐にも伝えたのだろうよ、そして

ukat kurunila sa... sanitānax<sup>40</sup>, istiwa...  
después el coronel le había dicho, es este...  
それから大佐が彼女に言ってきたのだそうだ、その...

“naya jutāw, ukūruw akūruw<sup>41</sup> jutāx<sup>42</sup>,  
“yo voy a venir, este otro día voy a venir,  
「私が行こう、これこれの日に私が行こう、

ukja suyitāt” sasa sanitānax,  
ese rato me vas a esperar” diciendo había dicho,  
その時に私を待っているように」と言って寄こしたんだと、

“mä janq’u kawallxat<sup>43</sup> jutā” sasina satānaw.  
“subido de un caballo blanco voy a venir” diciendo había dicho.  
「白い馬に乗って行こう」と言ったんだと。

Ukat “qhanapiniw khay<sup>44</sup> mantaniñ,

<sup>38</sup> *awusxapxit* < *awusaña* 「いじめる、虐待する (< スペイン語 *abusar*)」 + *-xa-px(a)-it(u)* 「完了・複数・単純形 3 人称主語 1 人称目的語」。この場合は主語が単数 (女領主) で、目的語が複数 (私たち) なので、複数を示す接尾辞 *-pxa* がこのように主語が単数で目的語が複数である場合に用いることができることが見てとれる。

<sup>39</sup> *kuna* は、疑問詞の *qué* の他に、ここでのように「～も (*también, más*)」という意味で用いることができる [Gallego 2008:84]。なお、ここでは語末の母音が落ちている。

<sup>40</sup> < *saña* 「言う」 + *-ni-tāna-x(a)* 「移動 (*translocativo*) ・遠隔過去 (*remoto lejano*) ・主題化 (*topicalizador*)」。*-ni* は話者の方へ向かう行為を示すため、この語り手の祖母は軍人と直接は話しておらず、自分の姉か妹を通じて伝えてもらい、軍人からの答えもその姉か妹を通じて伝えられたということが分かる。2 行後も同様である。

<sup>41</sup> これは具体的な日付を示すことなしに日にちを言う表現である。

<sup>42</sup> ここでは「来る」を意味する動詞 *jutaña* が用いられている。これは将校から見ると「行く」なのだが、相手の視点に立って「来る」という動詞を用いるのは、スペイン語の場合と同様である。スペイン語からの影響なのか、アイマラ語にも元々このような特徴が備わっていたのかは、よく分からない。

<sup>43</sup> < *kawall(u)* 「馬」 + *-xat(a)* 「～の上に (*superposición*)」。

<sup>44</sup> ここでのように指示語は、場所を示す接尾辞 *-ja* などがつかなくても、元の形のままで場所を示すことができる。



Después “claro siempre ahí voy a entrar,  
それから、「はっきりと見えるようにそこから入って行こう、

uñch’ukinitätaw, uküruw jutä” sasin, satānaw.  
me vas a venir a mirar (esperar), ese día voy a venir” diciendo había dicho.  
私のことを迎えにくるんだぞ、その日に私は行こう」と言ったのだそうだ。

Ukat... ukat tawaqut awichaxar<sup>45</sup> ukjam...  
Después... después de la joven a mi abuela así...  
それから...それからその娘から俺のばあちゃんに、こうやって...

ukjam parlaniwäs(ax) jutxatānay akjar.  
así hablando ya había venido aquí.  
このように話を寄越して、[大佐が] もう来たのだそうだ、ここにな。

(5) 大佐がキリワヤにやって来る  
Ukat llawintatäskiwi siy istix... achachilax achachilaxa.  
Después estaba encerrado dice pues este... mi abuelo, mi abuelo.  
そして閉じ込められていたと言うんだ、その...俺のじいさんが、俺のじいさんが。

ukat chhāx purinch ukat akaruw ist...  
después ahora llegaría, después aquí este...  
そしてさて着いたんだろう、それからここにその...

ukjam awisch ukat uküru jutañapaki<sup>46</sup>  
así avisaría, después ese día tiene que venir nomás,  
こう連絡したんだろう、そしてその日にもう来るはずだった、

ukürus uñch’ukitān siy,  
hasta ese día había mirado (esperado), dice,  
その日も待っていたんだと言うんだ、

akan alistpacha uka Mulumulunin utapa ukankān.<sup>47</sup>  
aquí ha debido alistar, esa en Mulumuluni su casa, ahí estaba.  
ここで準備をしたはずだ、そのムルムルニの彼女の[領主の]家に、そこにいたんだ。

Ukatā alistpachaw “purinini kurunilaw” sasin  
Después ha debido alistar, “va a llegar el coronel” diciendo,

---

<sup>45</sup> 音声では語末の r が w の音に聞こえるか。

<sup>46</sup> < jutaña 「来る」 + -pa-ki 「所有 (3 人称) + 限定」 。動詞の原形に所有の接尾辞がつくと「～しなければならない」という義務の意味になる。

<sup>47</sup> ムルムルニ (Mulumuluni) とは、キリワヤのアシエンダの母屋がある場所の呼び名である。この行以降の主語が誰かが問題である。後ろを読むと、女領主は後になって気づいた (知った) と語られているため、ここでの行為主体は語り手の祖母と母ということのようである。

そして準備をしたはずだ、「大佐が到着することになっている」と言いながら、

ukat “nayaw arxatām” sasaw satānax.<sup>48</sup>

después “yo te voy a defender” diciendo había dicho.

そして「私がお前を弁護してやろう」と言ったのだそうだ。

Ukatā kurunilax ukūruj jutañapaki

Después el coronel ese día ha tenido que venir nomás,

そして大佐がその日にもう来るはずだった

ukjax jutatānay siw kurunilax.

ahí había venido pues, dice, el coronel.

その日に来たんだと言うんだ、大佐がな。

Jupa uñch’ukitān<sup>49</sup> uñch’ukitān ast grave uñch’ukitānax.

Él había criticado, había criticado, grave había criticado.

彼は批判したんだそうだ、批判したんだそうだ、ひどく批判したんだそうだ。

Ukat janq’u kawallut mantaranttān<sup>50</sup> siy khayxa,

Después de caballo blanco entraba, dice pues, ahí,

そして白い馬に乗って入ってきたのだそうだ、と言うんだ、あそこにな、

nayra janiw awtu utjkāntix thakixa,

antes no había autos en el camino,

昔は道を行くのに自動車はなかったんだ、

puru uywamp sarnaqañān siya.

puro con animales tenía que andar, dice pues.

家畜と行かなければならなかったと言うんだよ。

Janiw nayas sum uñjawaykt, uñjawayt mā juk’anak (mawk’anak)

<sup>48</sup> この行で引用されている内容を述べたのは大佐であり、これは大佐からきた伝言の内容が想起されているのであろう。

<sup>49</sup> *uñch’ukiña* は「じっと見る、観察する (mirar, observar)」という意味の動詞であり、「見る (ver)」を意味すると思われる動詞 *uñña* に、行為の持続を示す接尾辞 (fijativo) *-ch’uki* がついたものである (なお、「見る」を意味する動詞は分離を示す接尾辞 (partitivo) *-ja* がついて *uñjaña* という形になるため、*uñña* という形をそれだけで見ることは基本的にない。*uñch’ukiña* は文脈によっては「批判する」という意味にもなる。スペイン語の動詞 *mirar* もアンデス高地では同様に「批判する」という意味で用いられる。

なお、数行上では、同じ動詞が「遠方から来る来客を迎えに出る」という意味で用いられており、藤田はこの動詞がこのように使えることを、これを聞いて初めて知った。フィロメナ・ニナはこの箇所を *vas a estar pendiente* 「来るかどうか気にして (待って) いるのだぞ」とも訳せると述べていた。

<sup>50</sup> *<mantaña* 「入る」+*-ra-nt(a)-tān(a)* 「連続的行為・動作の開始・遠隔過去」)。連続的行為を示す接尾辞 (serial) *-ra* が使われるのは、同じ行為が連続して行われる場合と、その行為が複数の者によって行われる場合があるが、ここでは前者であろうか。溪谷に入ってくる時にはジグザグに何度も向きを転換しながら入ってくることになり、その様子を指しているのであろうか。接尾辞 *-nta* には、動作の開始を示す役割と、内側へ入り込む行為を示す役割があり、ここでは後者である。

なお、溪谷に外から人がやって来るときには、このように「入る (*mantaña*) 」という表現が用いられる。

Yo no he visto bien, he visto un poco,  
俺はよく見たわけじゃない、ほんのちょっと見ているんだ、

piru ukjam antiguonaka istix, ukat,  
pero así las cosas antiguas este..., después,  
でもそういう風に昔のことはそうだったんだ、そして、

Ukã istipĩ kurunilax mantan siy,  
Ese este es pues... el coronel ha entrado, dice,  
そのあれだよ...大佐が入ってきたんだと言うよ、

kawallxat janq'u kawallxat,  
sobre el caballo, sobre el caballo blanco,  
馬に乗って、白い馬に乗って、

llix llix<sup>51</sup>, llix llix tasaw  
haciendo el sonido “llix llix, llix llix”,  
「リフ、リフ、リフ、リフ」という音を立てながら

ast yast mantaranttän siy khã parki<sup>52</sup>,  
y ya había entrado, dice pues, a aquella cuesta,  
そしてもう「溪谷に」入ってきたそうだ、そう言うんだよ、あの斜面へと、

khã khaya Majuran sataw uka parki ukjam link'ulink'jamaw<sup>53</sup> juti,  
aquel, aquel llamado Majurani, esa cuesta, así como link'ulink'u ha venido,  
あの、あのマフラニと呼ばれるあの坂、こう「リンク、リンク」と言わせてやって来た、

ast jawirar purin, ukat jawirat makhatan.  
hasta al río ha llegado, después del río ha subido.  
川のところまで到達して、それから川から上ってきた。

Ukawjitakiw asint uyux<sup>54</sup>, casa de hacienda,  
Ahicito nomás es la casa de hacienda, casa de hacienda,  
あのすぐそのところがアシエンダの家だ、アシエンダの家だ、

<sup>51</sup> この *llix llix* は馬のひづめの音を示す擬音語であるようだ。

<sup>52</sup> *parki* はスペイン語の *parque* に由来するが、これは「公園」のことではなく「斜面になっている場所」を意味する。キリワヤはイリマニ山の山裾にあり、ラパスから向かってきた場合に、ビラケ (*Vilaque*) 川に向かって下る斜面を下りてきて、川を渡ってから、キリワヤに向かって斜面をもう一度上ることになる。この地形を念頭に置くと、この辺りからの描写が分かり易くなる。

なお、このビラケ川は、そのやや下流でパルカ (*Palca*) 溪谷を下ってきたパルカ川と合流し、さらにその下流でラパス市内を貫いて (アスンタ・タピア・デ・アルバレスが住んでいたユーパンパ村のある) リオ・アバホ (*Río Abajo*) 溪谷を流れ下ってきたチョケヤプ (*Chuqueyapu*) 川と合流する。

<sup>53</sup> この *link' link'* も馬が立てる音を表現しているようだ。

<sup>54</sup> 川を渡って斜面を上り始めると、比較的すぐアシエンダの母屋へと到達する (キリワヤ村の中央広場はアシエンダよりもさらに斜面の上に位置している)。ここはそのことを言っている。

ukankiw patruna jakix,  
ahí está la patrona ha vivido  
あそこなんだ、領主が住んでいた、

ukat uk mantaranttän siw,  
después ahí había entrado, dice  
それからそこへと入ってきたそう、そう言うよ、

“ukjax purinisä” sas “mantaniw” sas saratānax,  
“ahí ha venido pues” diciendo, “ha entrado” diciendo había ido,  
「そこにやって来たぞ」と、「入ってきた」と言いながら、そこへと向かったそう、

istirux jawiraruw suyiri saratānax,  
a este... al río había ido a esperar,  
その...川へと迎えに行ったそう、

asint uyur mantki<sup>55</sup>, uka punkuruw sara... saratānax acha... awichaxax,  
a la casa de hacienda ha entrado, a esa puerta había ido mi abuela,  
アシエンダの家へと向かって行った、その戸口へと行ったそう、俺のばあちゃんが、

uka mamaxamp<sup>56</sup> ukjam saraqapxitānax<sup>57</sup> suyirix ukat,  
con esa mi mamá así habían bajado a esperar, después  
その俺のおふくろと、こう下りて行ったんだと、待つためにな、そして

Ukat chhā purin makatan siy,  
Después ahora, ha llegado, ha subido, dice pues,  
そしてさて、到着した、上ってきたと言うんだよ、

ukat yatitānaw siy istix patrunaxa, yatitānaw siy,  
después había sabido, dice pues, este... la patrona, había sabido, dice pues,  
そして知ったんだと言うんだよ、その領主が、知ったんだと言うんだよ、

“phamillaniw” sarakisä, “kurunilaw siw phamillapax,  
“tiene familia” ha dicho también pues, “coronel es, dice, su familia,  
「家族がいるんだ」と言ったんだなあ、「大佐だと言うんだ、その家族が、

chhā uka purin” sarakisä.  
ahora ese ha llegado” ha dicho también pues.

<sup>55</sup> これは *mantaña* のに接尾辞の *-k(a)* がつき、さらに単純形（現在-過去形）3 人称単数の屈折接尾辞 *-i* がついたものである。この接尾辞 *-ka* は当該の節を従属節化し、後ろの指示語 *uka* で受けられるようにするはたらきをする。隣接するケチュア語には、これに対応する接尾辞が存在しない。

<sup>56</sup> この箇所から、大佐を待っていたのは、この語り手の祖母と母の二人だと分かる。

<sup>57</sup> ここに *qa* が入っていると思われるが (*saraña* 「行く」に下方への行為を示す動詞派生接尾辞 *-qa* がつくことで *saraqaña* 「下る」になる)、あまり明瞭には聞き取れない。

今その者が到着した」とも言ったんだなあ。

Aka Manuk satän janchikay?<sup>58</sup> uka Manukax jichhax suyaski” sasin  
Este llamado Manuka XXX, ese Manuka ahora está esperando” diciendo  
このマヌカと呼ばれていた XXX、そのマヌカが今待っているところだ」と、

“punkun suyaski” sasin satän si, ukat,  
“en la puerta está esperando” diciendo había dicho, dice, después  
「戸口のところで待っているところだ」と言ったそう、そう言って、そして

ukat istix patrunaxa uk yatisin mistsunitänax siy punkuru.  
después este... la patrona eso sabiendo había salido, dice pues a la puerta.  
それからその...領主がそれを知って、出てきたんだそう、そう言うんだ、戸口へ、

Ukax suyirirakiy mistsunitänax siy, aaa ukat ast ukjam.  
Ese también a esperar había salido, dice, después así.  
その者も迎えに外に出てきたんだそう、そう言うんだ、そうしてもうこのように。

(6) 大佐とアシエンダ領主との邂逅と働きかけ  
Ukat kurunilax makatan yast ukat,  
Después el coronel ha subido y después,  
それからその大佐は上ってきて、そして、

yast ukat ukjaruw lat'aqix siy,  
y después ahí se ha bajado del caballo, dice pues,  
うんそしてそこで馬から下りたんだと言うんだよ、

ukat isti awichaxampix jikispacha  
después este... con mi abuela se ha debido encontrar,  
そしてその...俺のばあちゃんと顔を合わせたはずだ、

aruntasippachay uka mamaxamp.  
se han debido saludar pues ese con mi mamá.  
挨拶を交わしたはずだよ、その俺の母親と。

Ukat ast ukä patrunax aruntarakiw si wal qumanti si,  
Y después esa patrona también ha saludado, dice, bien ha abrazado, dice,  
そしてそれからその領主も挨拶したと言うんだ、しっかり抱擁したと言うんだ、

yast ukat ast patrunaxa kurunilaru utaparuw irpantasiwayx siya.  
ya y después la patrona al coronel a su casa se ha llevado, dice pues.

---

<sup>58</sup> 早口でいまいち聞き取りづらい。フィロメナ・ニナは *sachjamakiway* 「言ったのだと思うよ (creo que dice)」ではないだろうかと述べている。確かにそれで意味は通じるのだが、どうも音声がそのように聞こえない。

でそれから、領主が大佐を自分の家へと案内したと言うんだよ。

Janiw akar makatanxitix siy Mulumulunirux,  
Aquí ya no ha subido, dice pues, a Mulumuluni,  
ここには上ってこなかったと言うんだよ、ムルムルニに、

akawjita Mulumulun sataw utapax.  
aquicito es llamada Mulumulun(i) su casa.  
すぐこの近くのはムルムルニと言うんだ、彼女の家が。

Ukar janiw makatanxit siy ukat isti... asint uyuruk  
Ahí ya no ha subido, dice pues, y este... a la casa de hacienda nomás,  
そこへはもう上らなかったと言うんだよ、でこの...アシエンダの家にだけ、

uka patrunan utaparuki mantawayx siy kurunila, ukjam.  
a esa su casa de la patrona nomás ha entrado, dice pues, el coronel, así.  
領主のその家にだけ入ったと言うんだ、大佐が、こうね。

Ukat chhäh wal inwitit... inwitatäna kurunilaru uka patrunax,  
Después ahora bien había invitado al coronel esa patrona,  
そしてさて、食べ物を大盤振る舞いしたのだそうだ、大佐にその領主が、

ukjam ast manq'añanak churatän, umañanak ukjam wal inwit... inwitix siya.  
así ya mucha comida le había dado, bebida así bien ha invitado, dice pues.  
こうね、もう食べ物をいろいろと振る舞ったのだそうだ、飲み物もこうたいそう振る舞ったと言うんだよ。

(7) アシエンダ領主の態度が変わる

Ukat uka janirar kurunil purinkipanxa  
Después ese todavía no llegando el coronel  
そしてその、まだ大佐が着いてないうちに

ukja wali ast wal sumaptix siy istix patrunax,  
ahí bien, ya bien buena se ha convertido, dice pues este..., la patrona,  
そのときもう、もうすごく善良になったと言うんだよ、この...領主が、

llawsxiw<sup>59</sup> si istitx,  
ya le ha abierto la llave, dice de este...,  
鍵ももう開け放ったと言う、この...

kalawusut istirux achachilaxarux,  
del calabozo a este... a mi abuelo,

---

<sup>59</sup> *llawi* はスペイン語の *llave* 「鍵」に由来する。内方向への動きを示す接尾辞-*nta* を伴った動詞 *llawintaña* は「鍵で中に閉じ込める」という意味になり、外方向への動きを示す接尾辞-*su* (*eductivo*) を伴った動詞 *llawsuña* は(-*su* は直前の母音を脱落させる)、「鍵を開けて外に出してやる (*abrir la llave para sacarlo afuera*)」という意味になる。

牢からこの...俺のじいさんを、

janiw kalawusunk... kalawusunkxit siy.

ya no estaba en el calabozo, dice pues.

もう牢にはいなかったと言うんだよ。

Llawsxiy jikhanukxiw<sup>60</sup> siy.

Ya le ha abierto la llave, ya le ha dejado libre, dice pues.

もう鍵を開け放って、もうつながれていた縄から解いてやったと言うんだよ。

Ukjam ukat ast wali sumakipin ukjam.

Así después ya bien se ha abuenado siempre así.

こうそれからもう、すごくもう善良になったんだ、こうね。

Ukjam ukat ast, ukat kurunilaxa patrutarux sawayix siy,

Así después ya, después el coronel a la patrona ha dicho (de paso), dice pues,

こうそれからもう、それから大佐は領主に言ったと言うんだよ、

“phamillaxaw uka jani(w) ukjam awusañamäkit,

“mi familiar es ese, no debes abusar así,

「俺の身内なんだそいつは、こう虐待してはいかん、

janiw awusätat” sasaw sawayix siy istirux, patrutarux.

no abusarás” diciendo ha dicho, dice pues, a este... a la patrona.

虐待するんじゃないぞ」と言ったと言うんだよ、この...領主に。

Ukat chhax “janiw awusxät.

Después ahora “ya no abusarás.

それからさて、「もう虐待するんじゃないぞ。

Jupaw jani istinak lurañ munkit” sasaw satänax.

Él estas cosas no quiere hacer” diciendo había dicho.

彼はこういうことはやりたくないんだ」と言ったそうだ。

Ukat “kumunächixay, janiw wakiskit jupan lurañapax” sas

Después “comunario sería pues, no es necesario que él haga las cosas” diciendo

それから「共同体の人間なのだろうよ、彼がそういうことをする必要はない」と

ukjam liyinakax ukjamäpachänay nayraxa.

así las leyes así ha debido ser antes.

こう決まりはそういうことであったはずなんだ、以前は。

<sup>60</sup> 動詞 *jikhaña* は「縄を括りつけて引っ張る」という意味の動詞である。これに外に逸れていく動きを示す接尾辞 (alejador) である *-nuka* がついて *jikhnukaña* で「縛られていたものを解いてやる、自由にしてやる」という意味になる (*-nuka* は直前の母音を脱落させる)。

Kumunanaka janipini luririkänt siy patrunan istinak... trabajonakapxa.

Los comunarios no sabía hacer siempre, dice pues, del patrón estos... sus trabajos.

共同体の人間たちはやらないものだったと言うんだよ、領主のその...仕事をだ。

Ukjam ukat, ukat uka arumax uk ikix siy istixa... istix... kurunilax.

Así después, después esa noche ahí ha dormido, dice pues, este... el coronel.

そうしてそれから、それからその夜はそこで寝たと言うんだよ、その...大佐が。

Uk ikix siy, asint ura isti... asint uyu

Ahí ha dormido, dice pues, de la hacienda este... la casa de hacienda,

そこで寝たと言うんだよ、アシエンダのその...家で、

patrunan utap ikix siy.

de la patrona en su casa ha dormido, dice pues.

領主の家で寝たと言うんだよ。

Qhipüruw makatasinkix siy akarux.

A un día posterior está subiendo, dice pues, aquí.

その後日に上ってきたと言うんだよ、ここに。

Ukat akanx, (uka) qamart'awätaarak, siy

Después aquí, ese ha debido quedarse también,

それからここで、そいつが過ごしたはずなんだ、

ukat kutt'awayxarak sarawayxarak siy

después ya ha vuelto también, ya se ha ido también, dice pues,

それからもうまた帰っていった、もうまた立ち去って行ったと言うんだよ、

kawallut chik sarawayxarak si Lapaskama.

Junto al caballo ya se ha ido también, dice, hasta La Paz.

馬と一緒にもうまた立ち去って行ったと言うんだ、ラパスへと。

Ukjam ukat ukürut uksaruw janipiniw awusxatänatix

Así después, de ese día en adelante ya no había abusado siempre,

そのようにして、それから、その日から先はもう全く虐待はなかったそうだ、

achachilaxarus ni awichaxarusa.

ni a mi abuelo ni a mi abuela.

俺のじいさんにもばあさんにも。

Wali sumakiy istipxatänax... tratxatänax,

Bien bonito habían estido... ya había tratado,

本当によくあれたそうだ...もう扱ったそうだ、



jani ni trawajonakarus jit'xatānat ni kunas ukjam.

ni a los trabajos le había jalado (convocado) ni nada así.

仕事に強制的に連行するなんてことも何もなかったんだ、こうね。

Jall ukaw mā kuñtux<sup>61</sup>.

Ya eso es un cuento.

さあこれで一つの話だ。

#### IV-2 アスンタ・タピア・デ・アルバレスによる語り

A ver, kunjamas kamsañāspasā.<sup>62</sup>

A ver, cómo es, cómo se puede decir...

えーと、どうだったか、どう言えばいいんだったか...

Isti... gastiguirin<sup>63</sup> nayrax patrunax sipi awi... awichi... awiluxar<sup>64</sup>.

Este... sabía castigar antes la patrona, dice pues, a mi abuelo.

その...昔、領主がよく罰していたと言うんだよ、私のおじいさんを。

Ukat chhax awiluxax kastigat

Después ahora, mi abuelo ha sido castigado,

そしてさて、私のおじいさんが罰せられて、

sapa kuti kalawusun sayaskchi<sup>65</sup>

cada vez se estaría haciendo parar en un calabozo,

いつも牢の中に立たせられていたんだろう、

sapa kut jan manq'at jan manq'at ukan<sup>66</sup> sayaskchi.

cada vez sin comer, sin comer ahí se estaría haciendo parar

いつも食事もなしで、食事もなしでそこに立たせられていたんだろう。

Ukat awichaxax satān sipi

Después mi abuela había dicho, dice pues,

それから私のおばあさんは言ったそうなんだよ、

“kijasini phamillaxa utjaskchixay,

<sup>61</sup> これを語り始める前に、フリアン・タピアは藤田に5つ話を教えてやろうと言って語り始めている。そのため、この語り終わりにおいて、ここまで一つだと確認をしている。

<sup>62</sup> ここでは、年の前半にアスンタの弟フリアンから聞いた語りを覚えているかと藤田が尋ねたために、思い出そうとして言い淀んでいる。

<sup>63</sup> この動詞はスペイン語の *castigar* に由来しており、ここでの発音に最も近いと思われる音で表記する。次の行では、同じ単語がよりアイマラ語に近い音を用いて発音されている。

<sup>64</sup> フリアンは「おじいさん」に *achachila* を用いていたが、アスンタはスペイン語の *abuelo* に由来する *awilu* を用いている。ともにアイマラ語ではよく使われる単語である。

<sup>65</sup> 上のフリアン・タピアによる語りの中にもあるが、地下牢の中には横になるスペースがなく、ずっと立ちっぱなしでいることを余儀なくされた。

<sup>66</sup> 場所を示す際には、指示語 *uka* に接尾辞 *-ja* がついて *ukja* となることもあるのだが、どうもここは *uka* と発音しているようである。次の行も同様。

“me iré a quejar, habría mi familia pues”<sup>67</sup>,  
「文句を言いに行こう、家族がいるじゃないか、

Karmina<sup>68</sup> uk sarä, Karmina uk ukar kijasini” sas.  
donde Carmina iré, donde Carmina ahí iré a quejarme” diciendo.  
カルミーナのところに行こう、カルミーナのところにそこに文句を言いに行こう」と。

Ukat Karmina uk Lapas jutatayn,  
Después donde Carmina a La Paz había venido,  
そしてカルミーナのところ、ラパスの町に来たんだそうだ、

ukatä ukä Karmina ukar puritän,  
después a ese donde Carmina había llegado,  
それからそのカルミーナのところに到着したんだそうだ、

(uka)<sup>69</sup> phamillapa ukaru, kullakapa ukaru.  
(ese) donde su familia, ahí, donde su hermana.  
その彼女の家族のところに、彼女の姉妹のところに。

Ukat awisasitän awichaxax “akjamaw” sas,  
Después se había avisado mi abuela, “así es” diciendo,  
それから私のおばあさんは告げたそうなんだ「こういうことがあって」と、

“mamaxamppach akjamaw gastigui, uka sapa ratu gastigui,  
“hasta a mi mamá así castiga, ese cada rato castiga,  
「私の母親までこのように罰するんだ、そのいつも罰するんだ、

ukjam gastigapxit” sas.  
así nos castiga” diciendo.  
そのように私らを罰するんだ」と。

“Ukat uraq apaqañ munapxarakituw(a)” sas,  
“Después nos quieren quitar tierra también” diciendo,  
「それから我々の土地も取り上げようとしているんだ」と、

“ukax kumunal uraqichixay” sas satän,  
“eso sería tierra de comunidad pues” diciendo había dicho,  
「それは共同体の土地だろうよ」と言ったんだそうだ、

---

<sup>67</sup> この箇所をフィロメナ・ニナは *tengo todavía pues familia* 「私にはまだ家族がいるさ」と訳している。

<sup>68</sup> カルメン (Carmen) という名前をアイマラ語で読むとカルミーナ (Karmina) となる。アイマラ語には *e* の母音がなく、また必ず単語が母音で終わることが要求されるためである。ここではスペイン語の方もアイマラ語と同様に *Carmina* と記すことにする。

<sup>69</sup> ここで語り手がごくごく軽く *uka* と言っているように思うのだが、あまり判然と聞き取れないため括弧に入れておく。

“kawkit apaqitanix” sas,  
“de dónde me va a quitar<sup>70</sup>” diciendo  
「どこから取り上げようというんだか」と、

“ukatak jichhax gastigask ukjam” sas,  
“por eso nomás ahora está castigando así” diciendo  
「もうだから今このように罰しているんだ」と、

“kalawusu sapa kuti sayayaskchi” (sas).  
“calabozo cada vez se está haciendo parar” (diciendo).  
「牢にいつも立たせられているんだ」と。

Intunsis awichaxax saratän kijasir,  
Entonces mi abuela había ido a quejarse,  
そうして私のおばあさんは文句を言いに行ったんだそうだ、

ukat Karmina ukar puritayn,  
después donde Carmina había llegado,  
それからカルミーナのところに着いたんだそうだ

Karminax ukar kurunil yuqapamp jikisitän,  
Donde Carmina con el hijo de coronel se había encontrado  
カルミーナのところで大佐と彼女の息子と会ったんだそうだ、

Karminan yuaqapamp kurunilamp,  
con su hijo de Carmina, con el coronel,  
カルミーナの息子と、大佐と、

kurunilar ukham awisasitayn “ukjamaw gastigui” sasin.  
al coronel así se había avisado “así castiga” diciendo.  
大佐にそのように告げたんだそうだ、「こういうふうに罰するんだ」と。

“Intuns nayaw jutä, intuns jutäw nayax.  
“Entonces yo voy a venir, entonces voy a venir yo.  
「ならば私が行こう、ならば行こう私が、

Isti... istita... khä Chaskipamp uks jutä,  
Este... de este... ahí por el lado de Chaskipampa voy a venir,  
その...そこから...あのチャスキパンパのところから行こう、

---

<sup>70</sup> ここはアイマラ語から直訳をしたが、フィロメナ・ニナは *por qué me puede quitar* 「どうして私からとりあげようとするんだ」と訳しており、その方が分かり易いだろう。

Iwijuyu uk Apañ uks uka Qullanaruw mantani,<sup>71</sup>  
por el lado de Ovejuyu y Apaña, a ese Qullana voy a entrar,  
オベフーユとアパーニャのところから、あのコリヤーナへと入ろう、

Qullanat maqani istiru... Taqachiyaru,  
de Qullana voy a bajar a este... a Taqachiya,  
コリヤーナから下って行って、そこへ...タカチャへ、

Taqachiyat uñtanxitatax uka parki,  
De Taqachiya ya me vas a venir a ver en esa parte inclinada,  
タカチャからもうあの斜面のところにお前たちが来れば私が見えるだろう、

qhanaw jutaskä,  
clarito voy a estar viniendo  
はっきりと私がやって来ることになる

janq'u kawallut jutaskä" satānaw, janq'u kawallut.  
de caballo blanco voy a estar viniendo" había dicho, de caballo blanco.  
白い馬で来るつもりだ」と言ったんだそうだ、白い馬で。

Ukat jutatayn ukürux puriniñap urux,  
Después había venido ese día que tenía que venir,  
それから来ると言っていたその日に来たんだそうだ、

ü istini... uñch'ukinipxatayn,  
sí, este... habían ido a mirarle (para que llegue)  
うん、その...到着を確かめに見に「迎えに」行ったんだそうだ、

khurkatit<sup>72</sup> ast Khilihuayat uñch'ukinipxatān,  
del frente de Quilihuaya habían ido a mirarle  
真正面からキリワヤから見に「迎えに」行ったんだそうだ、

qhanapiniw mantan siy  
clarito siempre ha entrado, dice pues,  
もうはっきり見えるように入ってきたというんだよ、

“akax mantanisä” s(a)s, isti mamaxarux.  
“este ya está entrando” diciendo este... a mi mamá.

<sup>71</sup> 現在の車が通る街道もラパス市内からチャスキパンパ、オベフーヨ、アパーニャと通り、アパーニャに関所があつて街から外に出ようになっているが、その後で峠を越えた後に、キリワヤに向かうバスはコリヤーナやタカチャなどの山の上に位置する村々を通るのではなく、パルカ川溪谷の底のパルカの町を通過して川沿いを下っていく。このコリヤーナ村やタカチャ村は、アスンタ・タピアによる他の語りでも現れる地名で「タピア、藤田 2020」、かつての村人たちの生活においてはそちらのルートのほうが重要な位置づけをもっていたことが伺えるか。

<sup>72</sup> *khurkati* 「正面の向こう側 (más allá del frente)」 [Layme 2004:99]。 *khuri* 「その向こう」が元にあるか。なお、De Lucca [1987] は、語形を *khurkata* だとしている。最後の *-t(a)* は起点を示す名詞接尾辞 (procedencia)。

「この人がもう入ってきている」と、私のお母さんに。

Pirchikunakas turas..... manzananakas ukham apayatayn.

Durazno peruchiku manzanas más así había mandado.

ペルチコ桃<sup>73</sup>とリンゴもこう持って行かせたんだそうだ、

“Q’awt’asiyani<sup>74</sup>, ak churāta istiru.

“Voy a hacerle comer durazno, esto vas a dar a este...

「桃を食べさせてやろう、これをあげるんだこの人に...

Taqachiy jawirar saraqam” sas

Al río de Taqachiya bajá” diciendo

タカチャの川へ下りていけ」と言いながら

Taqachiya jawiraruw saraqatānax, uka q’ipt’ata,

al río de Taqachiya había bajado, eso cargado,

タカチャの川へと下りて行ったんだそうだ、それを担いで、

uka yast ukja saraqanch

ese ya ahí habría bajado,

そいつはもうその場所へと下りたんだろう、

ukat churpacha(w) uk q’awisiñapataki.

después ha debido dar eso para que él coma

そしてそれをあげたはずだ、[大佐が] 食べるように。

Ukjat makhatanxatayn kurunilax

De ahí ya había subido el coronel,

その場所からもう上ってきたんだそうだ、大佐が。

uka chikarakiw mamaxa makatanxatān<sup>75</sup> yast.

junto con ese mi mamá ya había subido ya.

その人と一緒に私の母ももう上ってきたんだそうだよ。

Punku ukawjitaruk uka patruna punkupa

Donde la puerta ahicito nomás esa puerta de la patrona

ちょうど扉があったまさにそのところ、その領主の家の扉

<sup>73</sup> 溪谷部で広く栽培される、ただの桃（durazno）よりもやや大きく柔らかく果汁の多いタイプの桃である。

<sup>74</sup> *q’awiña* 「リンゴ、ナシなど類似の果物を噛む」 [Layme 2004:158; De Lucca 1987:143]。フィロメナ・ニナによればこれは擬音語で、桃を噛んでいるときの音を表現するのだという。

<sup>75</sup> 「上る」を意味する動詞は、辞書においても *makhataña* と記録されているものと [De Lucca 1987:108]、*makataña* と記録されているものがある [Layme 2004:117]。この語り手も、どうも *makhata...* と言っているときと *makata...* と言っているときがあるようだ。いったん聞こえた音で記録しておくことにする。

ukjar kalli ukjarux makatanch,<sup>76</sup>  
ahí por la calle habría subido,  
そこを通りのところを上がって行ったんだそうだ

yast chiqak irpantawayxatānax patrunax.  
ya directo nomás le había guiado [al coronel] la patrona.  
もうひたすらまっすぐ領主が案内したんだそうだ。

Ukjax awilux irpsunxatānaw siy,  
Ahí a mi abuelo ya lo había sacado, dice pues,  
そこで私のおじいさんをもう外に出したと言うんだよ、

janiy kalawusunkatānat siw, irpsunxatayn.  
no había estado en el calabozo, dice, lo había sacado.  
牢にはいなかったと言うんだ、外に出したそうなんだ。

Ukat yast ukat satān sipī<sup>77</sup> kurunilax,  
Después ya después había dicho, dice pues, el coronel,  
それからもう、それから言ったそうだ、そう言うんだよ、大佐がな。

“ukjam gastigui sistamsā<sup>78</sup>. Janiw gastigātati,  
“así castiga te ha dicho. No lo vas a castigar,  
「こう罰しているとお前に言ったのだろう。そいつを罰するんじゃない。

ukaw nān phamillaxaw ukax.  
ese mi familia es ese.  
そいつは私の家族なんだ、そいつが。

Janipiniw gastigātati” sas.  
No lo vas a castigar” diciendo.  
そいつを罰するんじゃない」と。

Ukat jan gastiyxitix. Ukat ukjamaw. Ü.  
Después ya no lo ha castigado. Después así. Sí.  
それからもう彼のことを罰さなかったんだ。そういうことだ。うん。

<sup>76</sup> このアシエンダの母屋回りの描写はかなり具体的である。この語り手のアスンタ・タピアは10代の頃、農地改革直前の時代にこのアシエンダの女領主の付き添いのような役にあったことがあり（これについての語りは未公開）、その頃の具体的な記憶と組み合わせられているのかもしれない。

<sup>77</sup> ここは「言う」を意味する動詞 *saña* の遠隔過去（伝聞された過去を示す形）に続いて、同じ動詞の単純形が重ねられている。このように「言う」を意味する動詞を連続させることが、伝承が複数の人を経由していることを意味するのか、それともただ強調するために連続させているのかは、いまだによく分かっていない。

<sup>78</sup> *sistam* という形は、3人称が主語で2人称が目的語であり、だとすると人々が（あるいはこの家族が）女領主に言っている（ことを大佐が指摘している）という関係になる。聞き起こしの際には、目的語が自分で1人称となる *situ* の形の方が、家族が大佐自身に訴えてきたという関係になり、文脈には合っているだろうかと筆者はフィロメナ・ニナと話していたが、当初の *sistam* の形でも意味は通るのかもしれない。

## V まとめと今後の展望

本稿においては、アシエンダにおける女性領主の抑圧と、その抑圧に対抗するための語り手たちの家族の取り組みについてのオーラルヒストリーを、そのテキストを原文対訳で注釈をつけて示しつつ、そのテキストの意義についてジャンルとしての特徴と文体的特徴について考察した。アイマラ語の口頭での語りは、自らが直接体験したことと、人から伝え聞いた内容を文法的に区別するが、この区別は一般的な「口承文芸」と「オーラルヒストリー」の区分と必ずしも重ならない<sup>79</sup>。しかし同時に、本稿のテキストの検討から示されるのは、人から伝え聞いた内容を語る際にもそれが「口承文芸」的であるか「オーラルヒストリー」的であるかによって、用いられる動詞の活用形式を中心とした文体に差異が生まれるのではないということである。また同じ内容についての語りを、姉弟のそれぞれから記録したことによって、語り手による語りの差異と変容について考察するための手がかりが得られたことにもなる。

口承の語りは、人々による生きられた歴史を語りを通じて追体験することを可能にしてくれるだけではない。語り手や語りの内容の違いが、文体の細やかな違いを生み出し、それがアイマラ語話者たちの語りのジャンル認識や歴史認識へと接近する手がかりとなる。口承の語りのテキストの原文対訳での公開は、将来的な学習者への学習教材と研究者への研究素材を整備することに資することが期待されるが、同時に、この取り組みを重ねることで、個別の文法形式の性質と役割を問いなおしつつ、アイマラ語の語り論を構築することが可能になると思われる。

### 【謝辞】

この研究は、聞き取り調査の実施時には松下幸之助記念財団の国際スカラシップ（2011-12 年度）の、また聞き起こしと翻訳の実施時には文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「南米アンデス南部高地の言語多様性と口承の語り」（2021-23 年度）の助成を受けた。

### 参考文献

- Adelaar, Willem H., 1997, Los marcadores de validación y evidencialidad en quechua: ¿automatismo o elemento expresivo? *Amerindia*, 22:3-13.
- Briggs, Lucy T. and Sabine Dedenbach-Salazar Sáenz eds., 1995, *Manuela Ari: An Aymara Woman's Testimony of Her Life*. Bonner Amerikanistische Studien / Estudios americanistas de Bonn, Bonn.
- De Lucca D., Manuel, 1987, *Diccionario práctico aymara-castellano castellano-aymara*. Los amigos del libro, La Paz y Cochabamba.
- Espejo Ayka, Elvira, eds. Denise Y. Arnold y Juan de Dios Yapita, 1994, *Jichha nã parl't'ä: Ahora les voy a narrar*. UNICEF y Casa de las Américas, La Paz.
- 藤井貞和、1987、『物語文学成立史：フルコト・カタリ・モノガタリ』、東京大学出版会。
- 藤井貞和、2016、『日本文法体系』、筑摩書房（ちくま新書）。
- 藤田護、2014、「ボリビア・アンデスにおけるアイマラ語口承文学の躍動：ラパス市周辺の溪谷部における語りから」、『イベロアメリカ研究』、36(1)、pp.27-51。
- Gallego, Saturnino, 2008, *K'isimira - I. Gramática viva de la lengua aymara*. Radio San Gabriel, La Paz.
- Layme Pairumani, Félix, 2004[1991-1992], *Diccionario bilingüe aymara-castellano (tercer edición corregida y aumentada)*. Consejo Educativo Aymara, El Alto.
- 坂部恵、2008[1990]、『かたり：物語の文法』、筑摩書房（ちくま学芸文庫）。
- Spedding, Alison y Abraham Colque Jiménez, 2003, *Nosotros los yungueños / Nanakax Yunkas Tuqinkiripxtw*.

<sup>79</sup> この文法的特徴はアイマラ語だけでなくケチュア語にも共有されているものであり、アンデスという視座からすると、ケチュア語の場合についてもさらなる検討が必要になるであろう。

*Testimonios de los yungueños del siglo XX*. Editorial Mama Huaco y Fundación para la Investigación Estratégica en Bolivia (PIEB), La Paz.

タピア・デ・アルバレス、アスンタ、藤田護、2020、「南米ボリビアのラパス県溪谷部のアイマラ語口承テキストとその考察：近隣の村に実在した蛇娘の伝承」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、20、pp.215-242。

タピア・デ・アルバレス、アスンタ、ペドロ・サラビア・パロミーノ、フリアン・タピア、藤田護、2015、「南米ボリビアのラパス県溪谷部のアイマラ語口承テキストとその考察：蛇の力を得た娘の伝承」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、15、pp.115-152。

Valderrama, Ricardo y Carmen Escalante, 1992, *Nosotros los humanos / Ñuqanchik runakuna: testimonio de los quechuas del siglo XX*. Centro de Estudios Regionales Andinos “Bartolomé de las Casas”, Cusco.

採択決定日： 2023 年 8 月 22 日

掲 載 日： 2023 年 12 月 20 日



## Textos orales en aymara desde los valles del Departamento de La Paz, Bolivia:

### Historia oral sobre el abuso de la patrona de la hacienda de Quillihuaya

Julián TAPIA

Asunta TAPIA DE ÁLVAREZ

Mamoru FUJITA

UNIVERSIDAD DE KEIO EN SHONAN-FUJISAWA  
TALLER DE HISTORIA ORAL ANDINA

key words : aymara, historia oral, Bolivia, hacienda

Este artículo forma parte de la iniciativa desarrollada por Fujita para publicar textos en aymara, transcripciones de narraciones de tradición oral e historia oral, con su traducción al castellano andino y al japonés. Los textos presentados aquí fueron contados por Julián Tapia y Asunta Tapia de Álvarez sobre cómo la hacendada de Quillihuaya (provincia Murillo, departamento de La Paz) maltrataba a su abuelo, y cómo la abuela recurrió a su hermana que vivía en la ciudad de La Paz y al esposo de la hermana que era militar (coronel) para presionar a la hacendada para que pare este maltrato. Es una historia oral transmitida dentro de la familia. El capítulo I ofrece una explicación sobre qué tipo de relación colaborativa entre Fujita y la familia de los narradores posibilitó esta investigación. El capítulo II presenta el resumen de lo narrado. El capítulo III analiza la narrativa sobre qué tipo de relaciones existen entre los aymaras (jaqi) y la clase dominante se expresan en el texto, los diferentes énfasis que dan los narradores a sus respectivos contenidos y sus puntos en común, así como las características estilísticas y gramaticales de estas narraciones. El capítulo IV reflexiona sobre el proceso de transcripción, la ortografía del idioma aymara, y la variante del castellano que se emplea en la traducción, seguido por el texto y su traducción. El capítulo V concluye el artículo con las perspectivas hacia el futuro.